
ラブコメ？—Second Season—

須賀 隆太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブコメ？―Second Season―

【Nコード】

N7755B

【作者名】

須賀 隆太郎

【あらすじ】

「ラブコメ？」の続編。前作から3年、孝・明日実・椿は高校を卒業しそれぞれの道を歩き始めた。今度はどんな新たなストーリーが展開されるのか？

Part 1：卒業と新たな門出（前書き）

「ラブコメ？」の続編となっていますので、まずはそちらから読むことをオススメします。

Part 1：卒業と新たな門出

「孝くん、それホントなの？」^{たかし}

春も近いある日の夕方、松林高校三年五組の教室で男1人、女2人が話していた。

「ああ、本当だ、明日実^{あすみ}。オレは東京の大学に進学することが決まったよ」

孝と呼ばれた男子は目の前の女子たち――椿と明日実^{あすみ}にそう答えた。
「私たちと一緒に地元の大学に行くって話はどうなったの？」

椿がさらに続ける。

「椿……実はオレ、地元の大学落ちて、東京の一つしか合格してなくてさ。浪人以外の選択肢はそれしかないんだ」

孝は頭をかきながらそう弁解する。

「そうなんだ。それじゃしょうがないよね。卒業式まであと3日、遠距離恋愛になるから今のうちに恋人どうしの感触を体に覚えさせておかなくちゃ」

椿はそう言々と孝に抱きついてきた。

「あつ、椿ちゃんずるい！ 私もやるー！」

明日実も負けじと反対側に抱きついてきた。

「あのさ……胸が当たって動きづらいし、見られたら恥ずかしいから2人とも離れてくれないか？」

孝が左右に抱きついてる椿と明日実にそう頼む。

「う、うん。わかった」

2人は今さらながら顔を赤らめてそう言つと腕を離し、「帰ろうか」と言つて歩き出した。

（オレたちが再会してから約3年、この高校ともお別れか。長いよ
うで短いもんだな、高校3年間は……）

孝は思い出の詰まった校舎を見上げて心の中でそうつぶやいた。

3日後、彼らは卒業式を迎え、級友たちと涙の別れを惜しんだ。

彼らはこの春松林高校を卒業し、それぞれの道を歩き出す。椿と明日実は地元―長野の4年制大学へ、孝は東京の4年制大学へ。ここから彼らの新たな物語が始まる。

Part 1：卒業と新たな門出（後書き）

前作「ラブコメ？」の完結から4カ月半、ついに続編始動です。
感想などお待ちしております。

Part 2：入学式と熱烈的な勧誘合戦

「ここが今日からオレの暮らす家か……」

東京都内のある街にある一軒のアパートの前で孝は引越しの荷物をトラックから降ろしながらつぶやいた。

「でも、いくら23区外とはいえ都会で家賃3万円は安いよなあ…

…ま、見た目もきれいだしいいか」

孝はそうつぶやきながら業者を手伝って荷物を部屋に運んでいった。

「ん？ 新着メールが2件か……」

荷物を部屋に運び終え、業者が帰った後、孝が携帯を開くと、椿と明日実からメールが来ていた。

「えっと、なにに……『引越しのほうは片付いた？ そのうち遊びに行くね』か……来るとすればGWあたりかな。さて、片づけるか」

孝は2人にメールを返信すると、荷解きをするために立ち上がった。

それから数日後、孝はスーツを着て大学の入学式に臨んでいた。

「なんかスーツを着ると気持ちが引き締まる感じがするな……とにかく、今日から大学生だし、いろいろがんばるかな」

孝は入学式の式場となる体育館に入る前にそんなことをつぶやいていた。

孝の入学した都台大学みやこだいは、都内の大学にしては意外なほど偏差値が低く、他の大学を受験して落ちた受験生のためにかなりギリギリまで試験を用意している、いわば「最後の砦」の大学である。

「ふう、なんでこういった式っていつも長いんだ？ すっかり疲れちまったぜ……ってなんだこの人ごみは？」

孝が体育館の出口に向かうと、それを待ちかまえるように幾重にも人の環ができていた。先に出ていった新入生らしきスーツ姿の連中がその人波にもまれている。不思議に思いつつも体育館を出た孝もまた、同じように取り囲まれた。

「バスケ部、よろしく！一緒に大会を目指そう！」

「いやいや、キミは我がバレー部が求めていた人材だ！」

「キミのような人はぜひアメフト部にきてほしい！今なら部員が少ないから即レギュラーになれる！」

いろんな部活やらサークルやら、あちこちの勧誘を受けて、孝の手の中にはチラシの山ができていた。しまいには孝の勧誘のために同時に話しかけようとした2人がケンカを始めてしまいい、騒ぎに発展してしまった。

「とりあえず、家で考えてみます」

孝はケンカしてる2人を含めて勧誘してきた人たちにそう言うので、そそくさとその場を後にした。

「どこもすごい必死な勧誘だったな……ケンカまで始めちゃったけど、アレ大丈夫なのかな？」

帰宅後、孝はもらったチラシと格闘していた。とにかく数が多い。孝は背が高いので特に運動系の部活が目の色変えて勧誘に来ていた。「でも、のんびりやりたいから‘部活’じゃなくて‘サークル’がいいかな」

そうつぶやいて半分以上を占めていた運動部からの勧誘チラシをゴミ箱へ捨てる。

「残りは……あれ、たった5枚？」

運動部からのチラシを処分した孝の前に残っていたチラシはわずかに5枚だけだった。それらを見てみると、「週に2回軽い運動で汗を流そう！テニスサークルLPT」とか、あるいは「物書きさ

ん集合、来たれ文芸部、とか少ないながらもインパクトのあるチラシが並んでいた。

「いいや、もう夜も遅いし、またあとで考えよう」

孝はチラシを片付け、これからの大学生活が楽しくなるようにいろいろ考えつつ眠りにつくのだった。

Part 2：入学式と熱烈的な勧誘合戦（後書き）

ついに始まる孝の大学生活。

どんな人たちと出会うことになるのか？

P a r t 3 : 孝とクラスメートたち（前書き）

今回から新キャラ登場です。

果たしてどんな風に引つ掻き回してくれるのか？

Part 3：孝とクラスメートたち

入学式の翌日、新入生はまだまだ忙しい。いろいろとガイダンスなどが続いたため、ほぼ毎日来なくてはならないのだ。

「ふあゝあ……眠いな……」

孝はハデにあくびをしながらアパートを出ようとしたところで、

「八坂くん、おはようっ」

後ろから声をかけられたので振り返ると、入学式の後のクラスごとのガイダンスで近くに座っていた女の子がいた。

「ああ、おはよう。えーと、橋本さん……であつてたっけ？ まだ顔と名前が一致しないんだけど……」

孝がそのときの自己紹介を思い出してそう返すと、

「そうだよ。あたしは橋本^{はしもと} 桜^{さくら}。アパートの隣同士だから、これからよろしくねっ。一緒に行きましょうよ」

桜はそう言つて、孝の隣に並んで歩き出した。

「ああ、よろしく、橋本さん」

孝はまだ眠いのでちよつと無愛想気味に返して歩いていった。

「ねえ、八坂くんってどこ出身なの？」

ガイダンスが終わったところで、桜を含む女子数人が別の男子と話している孝のところに行ってきてそうたずねた。

「ん？ ああ、長野だよ」

孝は話が途切れたのを見計らつて質問に答えた。

「おっ、もう女の子と仲良くなつてたんか？ 八坂ってモテるな」
孝が話していた男子の1人、卓巳^{たくみ}がそう話した。

「モテると言えば、彼女はいるのか？」

もう1人の男子、義仁^{よしひと}が孝にたずねた瞬間、桜たちの目つきが変わった。まるでその質問を待っていたかのように。

「ああ、いるよ。地元の大学に行ってるから遠距離恋愛だけだな」

孝はこともなげにそう答えると、

「いるの！？ 写真見たいなー」

桜が一番リアクションが大きく、写真を見せてと迫ってきた。

「別にいいけど……なんでそんなに鼻息荒いの？」

孝が携帯を取り出しつつ、冷静に桜にツツコミを入れた。

「だって、八坂くんってクールでかつこいいから、彼女がいるならどんなかわいい女の子なのかなって結構気になってさー。でもそんなに鼻息荒くしたつもりはないよー」

桜は少し拗ねたように孝を睨んだ。

「まあいいけどさ。はい、これがオレの彼女の椿だよ」

孝が椿の写真を見せると、桜たちは黙り込んでしまった。

（うーん、結構かわいいけど、遠距離っていうハンデを負った状態ならあたしにも勝ち目があるかも……）

桜は黙って椿の写真を眺めつつ、心の中でそう考えていた。

「もういいかな？ さーて、ガイダンスは終わったし、そろそろ帰るかなって」

孝は携帯をしまうと、「またな」と卓巳たちに告げて立ち上がった。

「あつ、八坂くん、どうせ隣同士だし、一緒に帰ろうよっ」

桜も他の女子たちと別れて孝と並んで歩き出した。

「ねえ、八坂くんは彼女と遠距離恋愛になって寂しくないの？」

帰り道、桜が突然孝にそうたずねた。

「寂しいも何も遠距離恋愛になった原因はオレ自身にあるからな。オレにそんなことを言う権利なんかないよ」

孝はわずかに笑顔を見せてそう答えた。

「やっぱ八坂くんってかつこいい！ 遠距離の彼女なんて別れてあたしと付き合って！」

桜はそう言うといきなり孝に抱きついた。

「ちよっと待った。かつこいいって言ってくれるのはうれしいけど

オレにはまだ彼女（こがへ）がいる。ただでさえ一緒の大学に行くっていう約束を果たせなくて椿を裏切ってるんだ。これ以上椿を裏切れないよ」
孝は冷静に桜を引き離し、そう告げたところで、アパートの前に着いた。

「それじゃ、またな」

孝はそう言つてさつさと階段を上がつて部屋に入つていった。

「むう……あたしはこのくらいじゃ諦めないよ。遠距離の彼女なんか忘れさせてあたしの彼氏にするんだからっ」

桜は悔しそうにそうつぶやくと、孝の部屋の隣にある自分の部屋に入つていくのだった。

Part 3：孝とクラスメートたち（後書き）

まるで明日実のような押しの強いキャラ・桜。

彼女はきつと今後も孝に熱烈アプローチをかけてくるだろう。

孝は椿のいない寂しさにつけこむ桜の誘惑を振り切れるのか？

Part 4：つかの間の休息も安息にはならず（前書き）

大学生になってから初めての休日（？）、本来なら休息が取れるはずだが……？

Part 4：つかの間の休息も安息にはならず

次の日。今日は上級生のガイダンスのため、孝たち新入生はつかの間の休息である。……が。

「なんでキミが朝っぱらからここにいる？　ってかどうやって入った？」

孝が朝起きると、なぜか隣に桜が寝ていた。慌ててゆすって起こすと、

「だってえ、普通にやってダメならもう実力行使しかないじゃない。カギは簡単に開いたわ」

桜は悪びれる様子もなく、「てへっ」と軽く舌を出した。

「キミがどんな手段に出ようが、オレの椿への想いは揺るがない。ほら、帰った帰った。それと、次やったら場合によっては不法侵入で訴えるからな」

孝は警告をすると、桜の背中を押して玄関から放り出した。

「しぶとい……でも諦めないよっ」

桜が部屋に戻る寸前、彼女の負け惜しみが聞こえた気がしたが、孝はあえて聞こえないフリをした。

「カギ、替えとくか……」

孝はそうつぶやくと、着替えて買い物に出かけた。

そのころ、椿と明日実は……

「ねーねー、キミたちかわいいね。俺たちとお茶でもしない？」

この日は2人の入学式。式を終えて帰ろうとしている2人に、すでにこの日10人目となるナンパ男が話しかけてきた。

「ごめんなさい。私たち、彼氏持ちですから」

椿がそう言っであっさり断る。

「ちえっ、彼氏いるのか。まあ、2人ともかわいいし、納得だな」

ナンパ男はそう言って引きあげた。

「椿ちゃん、ありがとう。彼氏がいるのは椿ちゃんだけなのに、私をかばってくれたのね」

ナンパ男がいなくなったのを確認してから明日実が椿に礼を言った。

「気にしないでいいわよ。あんな軽そうな男についていたら何されるかわからないもの」

椿はそう話し、歩き出した。

「孝くん、大丈夫かな？ 都会は妙な人がわんさかいるって噂だし……」

明日実がふとそんなことを言い出した。

「そうね……今の私たちにできるのは孝くんを信じることだけ。でもやっぱり心配だし、予定通りゴールデンウィークあたりにでも遊びに行ってみましようか」

椿がそう提案した。

「賛成。それじゃ、もう早速計画立てようよ。いつ行くかってことを孝くんにも伝えておかないといけないだろうし」

明日実もノリノリで計画を立てるために2人は明日実の家に行くのだった。

孝がホームセンターで交換用の新しい玄関のカギを購入し、取り付けを終える頃には日が暮れかかっていた。

「さて、そろそろ夕飯作るか」

孝はひと息ついてから、夕飯のメニューを決めるため、冷蔵庫を開けた。

「あまり材料ないか……しゃーねえ、今日は手軽に野菜炒めだな。明日はスーパー行かなくちゃな」

孝は冷蔵庫の中を見てため息をつく、キャベツ、豚肉、もやしなどを取り出し、手早く炒めはじめた。

「よし、完成……ってなんでお前がいる!?」

孝が料理に夢中になってる間にいつの間にか桜が部屋に上がり込み、座って待っていた。

「それが……あたしの部屋の冷蔵庫、材料が何も入ってないのに気づいてさ……ちょうど隣の八坂くんが料理を始めたような音が聞こえてきたから少し分けてもらおうと思ったんだけど、ダメ？」

桜は上目遣いで孝を見つめつつ、そう頼んだ。

「ちっ、そんな顔されて断れるかよ。材料使いきるために多めに作ったから、持っていきなよ」

孝は今作った野菜炒めをお皿に分けてやり、桜に渡した。

「ありがとう、八坂くんっ！」

桜はそう言っただけで孝に抱きつこうとしたが、

「そこまで気を許したつもりはないっ！ ほらほら、用が済んだらさっさと帰る！」

孝はカウンター気味に桜にデコピンをぶちかまし、背中を押して部屋から放り出した。

「あの上目遣いで陥落しないとは、かなりの強敵ね……でも絶対落として見せるわ！」

玄関の外で桜の決意表明のような声が聞こえたが、孝はまたも聞こえないフリをした。

（なんで橋本さんはあそこまでオレにこだわるんだ？ オレなんかよりもっとかっこいい男はいくらでもいるだろうに……）

孝はいろいろと考えてみるが、答えは出ないまま夜は更けていくのだった。

Part 4：つかの間の休息も安息にはならず（後書き）

いったいなぜ桜はここまでしつこいのか？
そして孝の受難はどこまで続く！？

Part 5：親睦旅行、バスの中にて（前書き）

かつて連載していた作品で似たようなシーンがあったけどそこはツッコミ禁止の方向で。
今回は短めです。

Part 5：親睦旅行、バスの中にて

「うん、快晴。旅行日和だな」

数日後、孝たち都台大学の新生たちは、お互いを知るため、そして大学のことを知るために毎年企画されている親睦旅行のためにバスで群馬の伊香保温泉に向かっていた。

「そうだねー。最高の天気だねー」

孝のつぶやきにすぐ隣から男のものではない声が返ってきた。

「おかしいな……確か隣には卓巳がいたと思ったんだが……いつの間にか？」

孝が隣の席を見ると、卓巳がいたはずの席にはいつの間にか桜が座っていて、卓巳は後ろのほうで寝ていた。

「席を代わってもらったんだよ。あたしは八坂くんの隣がよかったからね」

桜はおそらく並の男なら十中八九陥落するような特上の笑顔でそう話した。

「ふーん、まあなんでもいいけどね。彼女持ちのオレは他の女の子に揺れることもないし」

孝は桜に「彼女持ち」の部分を強調するように言い、他の場所でもわいわい騒ぎながらバスは走っていた。

しばらくして、孝の携帯が鳴り響いた。どうやらメールらしい。

「ん、椿からか……椿たちも今日から親睦旅行なんだな。行き先は

……伊香保？ まさかな……」

孝は返信でホテルの名前を聞くと、そこまではわからない、と返ってきた。

「同じ伊香保のどこかに椿たちも来ている。けど同じホテルでもない限り会うことはないよな」

孝がそうつつぶやいて外を見ると、いつの間にかバスは高速を下り

て市街地を走っていた。

とまあそうこうしてるうちにバスはホテルの駐車場に到着した。各自荷物を持ってホテルに入ろうとしたとき、団体客のリストが孝の目に入った。

孝たち都台大学は当然として、その隣にもうひとつ、「光稜大学ヒカリリョウ」
「一行さま」という名前もあった。そこに後ろから、

「このツインタワーホテルにはうちの他に長野から来てる別の大学も泊まってるからな。大学生として、自覚を持って行動するように」と、引率の教授が声をかけた。

（長野の大学……しかもこの光稜大学ってオレが落っこちたところだよな。と、いうことは……？）

孝があれこれ考えを巡らせていると、

「八坂くん、どうしたの？」

桜が団体客のリストとにらめっこしている孝のところに来てたずねる。

「ああ、いや、なんでもない。ほらほら、女子はあっちだろ？」

孝がそう言って桜をツインタワーの左側に続く通路へ追いやり、自らもツインタワーの右側へ向かう。そこに再び椿からメールが入る。

「やっぱり、そうか……椿たちもこのツインタワーホテルに泊まるのか」

孝は自らの考えが間違ってたことを知り、彼女に会えるかもしれないうれしさがある反面、熱烈的なアプローチをかけてくる桜と椿たちが出会ったらどうなるのかと不安にもなるのだった。

P a r t 5：親睦旅行、バスの中にて（後書き）

何の偶然か、椿たちの宿泊先も孝たちと同じホテルだった。
孝と椿は会えるのか、そして桜との遭遇はあるのか？

Part 6：椿VS桜 R O U N D 1 & 1 t：宣戦布告 & g t；

このツインタワーホテルは10階建てで、1階のエントランスと3階と6階が渡り廊下でつながってるほかは独立した2つの建物で造られてる。

「なるほど、男女を分けるには最適な建物ってことだな」

孝は男子側の部屋が割り振られた右側の建物に向かう途中、このホテルの見取り図を見て、そうつぶやいた。

「おい、八坂、早く部屋に荷物置かないと集合時間迫ってるぞ」

卓巳がエレベーターに乗り込んだ状態で孝を呼んだ。

「わかった、今行く」

孝は1泊2日の荷物を抱えてエレベーターに乗り込んだ。

孝たち都台大学は西棟（女子）と東棟（男子）ともに7階より上を割り振られ、もうひとつの光稜大学は3～6階を割り振られていたらしく、エレベーターに相乗りしていた人が6階までにいなくなり、エレベーターは孝たちだけになった。

「よし、ここだな。オレたちは705号室だ」

孝、卓巳、義仁で一つの部屋が割り振られ、3人は7階で降りると705号室に入っていた。

「荷物を置いたら、すぐに6階の渡り廊下の真ん中にある集会場に集合だつてよ」

義仁が孝と卓巳を促し、3人で6階に向かった。

集会場では、引率の教授が注意事項をあれこれ述べ、それが済むと、スーツ姿の上級生がアドバイザーとして出てきて大学の楽しさ等を存分に語っていた。さらにサークルの勧誘や、みんなでゲームをして盛り上がり、2時間ほどで集会を終えた。

「それじゃ、解散します。夕食は3階に食堂があるので、そこに夕方6時半集合です」

上級生のアドバイザーがそう話した瞬間、さっさと立ち上がって部屋に戻るもの、あるいはその場で話し込むものなどそれぞれの行動をとり始めた。そして、桜は……

「やーさーかーくーん！」

卓巳たちと一緒に集会場を出て部屋に戻ろうとした孝に桜が猛然とダッシュし、タックルしてきた。

「うわっ！ いきなり何するんだ、橋本さん！」

孝はタックルの勢いで少しよろめいたものの、倒れることなく後ろにへばりついている桜をにらんだ。

「だってえ……部屋が別々で寂しいんだもん……」

桜はまたしても上目遣いで孝を見つめる。

「はあ……部屋が別々なのは当たり前っ！ 男女で分けないと何かあつたら大変だろうが」

孝がため息をつきながら桜を引き剥がそうとする。

「ええ〜？ あたしは別に構わないのに〜」

桜も離れたくないと踏ん張る。

「オレや大学側が構うんだ！」

そう言いながら孝は桜を引き剥がし、集会場を出る。と、

「孝くん……」

孝の耳に聞きなれた声が聞こえてきた。聞こえたほうを見ると、

「椿……明日実……」

孝の目に数週間ぶりに会う恋人と幼なじみの姿が飛び込んできた。2人を含む光稜大の学生のうち、6階の部屋を割り振られたと思われる学生たちがエレベーターや階段で上がって来ていて、椿たちは階段で上がってきたところで孝を見つけたらしい。

「八坂くん、待ってよー」

後に続いて桜も集会場から出てきた。

「あーもうしつこいな、せっかくの再会を邪魔するな」

孝は桜を突き放すと、椿たちのもとに歩み寄った。

「久しぶりだな、椿、明日実。まさかこんなところで会えるとは思ってなかったぜ」

孝が笑って椿たちに挨拶する。

「ホント、久しぶりだねっ、孝くん。すごい偶然だね。ねえ椿ちゃん……椿ちゃん？」

明日実がそう答え、椿に同意を求めようとしたが、返事がないので、顔をのぞきこんでみると、椿は泣いていた。

「おっ、おい、椿！？ どうしたんだよ？」

突然泣き出した椿に孝も明日実も驚き、あわててたずねる。

「うっん、なんでもないの……なんか久しぶりに会えたらうれしくって……」

椿はしばらくしたら泣きやみ、再会を喜んだ。と、そこに……

「やーさーかーくーん！」

相手してもらえないことにイラついたのか、桜が再び勢いをつけて孝にタツクルしてきた。

「いいかげんにしろっ！ 邪魔をするなって言っただけだ！」

孝は再び桜を突き放し、椿たちのほうに向き直った。

「孝くん、その人は？」

明日実が桜のほうを指差し、孝にたずねる。すると、

「あたしは橋本 桜。八坂くんのクラスメートで恋人候補だ！」

桜が起き上がって話に乱入し、とんでもない発言をさらっと言ったのけた。

「孝くん……浮気？」

椿が泣きそうな顔でそう孝にたずねる。

「そんなわけないだろ？ 橋本さんが勝手にそう言ってるだけだ。オレの彼女は椿、お前だけだ」

孝は椿を落ち着かせるため、穏やかにそう話した。それを援護するように、

「お互いに苗字で呼び合って、よくも恋人候補なんて言えたもん

ね。下の名前で呼び合えるようになってから出直したほうがいいわよ」

明日実が勝ち誇ったように桜に告げる。

「そっちの椿って人はやさ……いや、孝くんから写真を見せてもらったけど、あんたはいつたい孝くんのなんなのよ!?」

桜も負けじと反撃する。

「私は孝くんの幼なじみで、高校時代に孝くんをめぐって椿ちゃんと争ったの。椿ちゃんに負けはしたけど、孝くんが選んだんだから文句はないわ。それからは親友関係ってやつよ」

明日実はそんな桜を軽くあしらうように質問に答える。と、

「あつ、いたいた。桐生さん、古川さん、点呼にもいないから探しに来たんだよー」

どうやら椿たちの知り合いらしき女の子が声をかけた。

「あつ、ゴメン。今行くね。それじゃ、孝くん、またメールするね。それと、その……桜さんと言いましたか。孝くんは私の彼氏です。渡しませんからね!」

椿は探しに来た子に謝ると、桜に宣戦布告をして西棟のほうに向けて歩いていき、孝も「またな」と言っただけで東棟のほうに歩いていった。

「むつきー! あんな女には負けないわよー!」

あとには桜の叫び声だけが空しく6階の集会場前の渡り廊下に響くのだった。

P a r t 6 : 椿 V S 桜 R O U N D 1 & 1 t : 宣戦布告 & g t ; (後書き)

孝が恐れていたことが現実になってしまった。勃発してしまった女の戦い、まだ戦いは始まったばかりだ！

Part 7：夕方、休息のとき（前書き）

親睦旅行の宿泊先のホテルで椿・明日実と再会した孝。
だが話してる最中に桜が乱入、女の戦いが勃発してしまった。
果たしてこの旅行、無事に終わるのか！？

Part 7：夕方、休息のとき

「おつ、やっと戻ってきたか。八坂、さっき話してたかわいい二人組は誰なんだ？」

椿たちと別れ、705号室に戻ってきた孝は、早速卓巳と義仁に質問攻めされていた。

「ああ、あの子たちはオレの彼女と幼なじみだよ。偶然にも同じ日に親睦旅行に来て同じホテルに泊まるみたいだ」

孝がそう話すと、

「そうか。そいつはすごい偶然だな。で、大丈夫だったか？」

卓巳がひとしきり頷いたあと、不意に孝にそうたずねた。

「ん？ 大丈夫だったかつて、何がだ？」

孝は質問の意味を理解できず、卓巳に聞き返した。

「ほら、八坂が彼女と話してるところに橋本さんが乱入してただろ？ あれで修羅場になってるんじゃないかって少し心配してたんだよ」

卓巳がそう説明すると、

「ああ、修羅場と言えば修羅場かもな。でも、この女の戦いはどう考えても橋本さんに勝ち目はないな」

孝は笑いながらそう言った。と、そのとき孝の携帯電話が鳴った。

「おつ、椿だ。はい、もしもし」

孝が嬉しそうに電話に出ると、

『もしもし、さっきのことを詳しく聞きたいんだけど、いいかな？』
椿はさっき別れ際に見せたトゲトゲしい雰囲気を感じさせない声で孝にそう聞いた。

「ああ、いいよ。まず橋本さんは本人も言ったとおり、大学でのクラスメートだ。だけど、それ以上の関係はないよ。せいぜい今住んでるアパートで隣同士だったことくらいだ」

孝は桜について椿にそう説明した。

『隣同士って言っても別に何もないんだよね?』

椿がさらに念を押すように孝にたずねる。

「ああ、もちろんだ。やましいことは何一つとしてないよ」

孝も自信を持って椿に答える。

『それならいいんだ。たぶん夕食のときにまた食堂で会うと思うから、話せるといいね。それじゃ、またね。大好きだよ、孝くん』

椿はそう話し、

「ああ、またな。オレも大好きだよ、椿」

孝もそう言って電話を切った。

電話を切った孝が卓巳たちのほうを見ると、2人とも部屋のベッドの上で悶えていた。

「どうかしたか、2人とも?」

孝が2人にそう話しかけると、

「あ、甘い……なんだこの甘ったるい会話は……」

「ああ、これぞまさにバカップル……しかも自覚がないからタチが悪い」

卓巳も義仁も孝の電話の内容があまりに甘ったるくて悶えていたらしい。

「そんなにバカップルっぽかったか? そいつはすまなかった」

孝は素直に2人に謝った。

その後は主に騒動を引き起こす原因と離れているおかげで、何事もなく夕方になった。

「そろそろ夕飯の時間だな。食堂行こうぜ」

孝が時計を見ると、夕方6時15分だった。

「そうだな、そろそろ行くか」

卓巳と義仁も寝転がっていたベッドから起き上がり、3人で部屋を出て、食堂に向かうのだった。

Part 7：夕方、休息のとき（後書き）

夕食までのひとときの休息で英気を養い、再び孝は修羅場になることが予想される夕食の場・食堂へ。

椿VS桜、ROUND 2、開戦か！？

文字数安定しなくてすみません……

P a r t 8 : 椿 V S 桜 R O U N D 2 & 1 t : 食堂編 & g t ; (前書き)

今回は平均的な長さです。

Part 8：椿VS桜 ROUND 2 & 1 t・食堂編 & g t；

ホテルの食堂は3階の渡り廊下の部分に作られている。孝たちが食堂にやってくると、入り口のドアの前に看板がかけられていた。

「ん？ “席は自由に選べます” だつてさ」

卓巳がいち早く看板に気づいてそれを孝たちに伝える。

「つてことは、大学ごとに固まる必要はないってことか。八坂、お前どうする？ 彼女を探し出して一緒に食べるのか？」

義仁が孝にたずねる。

「その辺で適当に座るからいいよ。それに、こっちから出向かなくなつて……」

孝がそこまで言いかけた、そのとき。

「あつ、孝くん！ 一緒に食べようよ！」

すでにテーブルについていた明日実と椿が孝を見つけて手を振っていた。

「……ほらな。こっちから出向かなくなつて向こうから来るんだから」

孝は苦笑しつつ、明日実たちのほうへ向かった。

6人まで座れるテーブルを確保していた明日実たちのおかげで、卓巳や義仁も一緒にテーブルにつくことができた。

このホテルの食堂はバイキング形式になっていたので、各自が食べたいものを取りに行き、さて食べようかというとき、

「うわーん、出遅れたあー！ あつ、孝くん、一緒に食べようっ！」

桜が食堂に飛び込んできた。

「残念ね、桜さん。孝くんは私たちと一緒に食べるの。今回はあなたが入るスキはないわよ」

和やかな雰囲気も一転、椿の冷たい一言が飛ぶ。

「ううー、空席ひとつあるじゃない！」

桜の必死の反論に対し、

「ふふん、空席はあるわよ？ でも孝くんの隣は私。あなたは孝くんの真向かいにでもどうぞ」

椿は鼻で笑って孝の向かい側の空席を指した。

「遠藤くん、席を代わってくれる気はないかしら？」

桜は孝の左隣にいる卓巳（本名・遠藤卓巳）に頼んでみた。

「悪いがこれ以上修羅場を見たくないので断る。八坂とその彼女の間には誰も入り込めないよ。いい加減諦めた方がいいんじゃないのか？」

卓巳は即答で断ると、様子を伺いつつ、食事を再開した。

「始まりは一目惚れだったけど、あたしのこの恋心はもう誰にも止められないわ！ 彼女がいたって奪っちゃえばいいんだから！」

桜はそう叫ぶと、孝の向かいにあったイスをひつつかみ、卓巳をどかして無理やり孝の左隣に割り込んだ。

「そこまでするか……」

桜の暴挙に驚きつつも、このままでは食べづらいので卓巳と義仁はひとつずつ席をずれることにした。

「まあ、橋本さんがどこで食べようとオレたちには関係ないよな、椿」

孝はそう言って桜に背を向けた。

「そうね。私たちはカップル流の食事を楽しみましょう」

椿は孝に同意すると、おかずをつまみ、孝の口に持っていった。いわゆる「あーん」である。

「あのさ、お二人さん？ みんなが見てる前でそういうこと、よくできるね？ 恥ずかしくないのか？」

孝と椿が発するカップル特有の甘い空気に周りがため息をつく中、卓巳が冷静に突っ込んだ。

「はっ！ すまん、久しぶりの再会に場所を忘れてついやっちゃまった」

孝は頭をかきながら謝った。と、左隣で微妙な動きをしている桜を見つけ、

「橋本さん？ 先に言っておくけどキミからじゃ、あーん、はやらないよ？ アレは恋人同士だからこそこできるものだからね」

孝の先制パンチに桜はビクツとして、

「……バレた？」

と一言だけつぶやいた。

「ああ、丸見えだった。密かにおかずをつまんでタイミングを伺ってたけど、無駄だったね」

孝は完全に桜を突き放し、自らの食事を再開した。椿もこれ以上「あーん」をやるうとはせず、時々会話しながら食事の時間は過ぎていった。

「それじゃまたな、椿、明日実」

「うん、またね、孝くん」

食事を終え、食堂を出たところで椿たちと別れ、孝たちは部屋に戻った。そして……

「あたしはこの程度じゃ諦めないわよー！」

1人取り残された桜の叫び声が食堂に響きわたるのだった。

Part 9：夜中の部屋に忍び寄る黒い影

「どうやらそろそろ消灯だな。悪いが先に寝る」

現在時刻午後10時30分。孝は卓巳たちにそう話すと、さつさとベッドに潜り込んだ。

「夜はこれからだ、と言いたところだが、さすがにアレじゃ疲れてもしょうがないな。ああ、安心してくれ。オレらは先に寝たヤツにイタズラを仕掛けるようなことはしないから。なあ、相沢^{あいざわ}？」

卓巳が隣のベッドにいる義仁（本名・相沢義仁）に同意を求める。

「ああ、そうだな。普段ならやるだろうが、あんな修羅場の当事者じゃ疲れても仕方ないな。おやすみ、八坂」

義仁も同意し、寝転がって読書を再開した。

「あ、ちよつと2人に相談なんだが……」

孝はいったん起きあがると、卓巳たちに何やら耳打ちした。

「オツケー、任せてくれ。オレたちは深夜0時くらいまでは起きるだろうから、それまでは引き受けた」

卓巳はニヤリと笑って孝の秘密の提案を引き受けるのだった。

午後10時45分、消灯後の東棟705号室に忍び寄る黒い影。

「んふっ、部屋に忍び込んで孝くんを襲っちゃおっ」

黒い影——もとい桜は見回りの教授たちの目をかいくぐり、西棟8階の自分の部屋をこっそり抜け出し、階段で6階に降りると、渡り廊下を通って東棟に入った。7階への階段を上がろうとしたとき、人の気配を感じたのであわてて隠れると、案の定見回りの教授だった。

（意外と監視の目が厳しいわね……）

桜は教授をやり過ぐすと、すでに消灯されて非常灯の明かりしかない暗い廊下をゆっくりと歩き出した。

(705号室……ここね)

桜は部屋番号を確認すると、そつとドアを引いた。いざというときのためにカギはかけない決まりになっているので、ドアは簡単に開いた。

(他の2人もすでに寝てるようね。それじゃ、たゞかしくん！)
部屋に入った桜は、卓巳たちも含めてすでに寝ていることを確認すると、‘女版ル。ンダイブ’の要領で下着を残して服を脱ぎ去り、孝の寝ていると思われるベッドにダイブした。

と、そのとき。‘パチッ’という音とともに部屋の明かりがついた。

「残念だったな、橋本さん。そこまでだ」

そう言いながら卓巳と義仁がクローゼットやトイレから出てきた。

「……ほえ？」

桜が状況を把握するためにあたりを見回すと、桜のダイブしたベッドに孝の姿はなく、その隣に寝ていた。桜がダイブしたところには、孝の荷物がカモフラージュとして布団にくるまっていた。全員が寝ていることを偽装するために、もうひとつのベッドも荷物を布団に押し込んでおいたのだ。

「まったく、八坂の危険察知能力は意外とすごいな。予想通りにやってきて、見事に罠にハマるとはな……ていうか服を着てくれ。目のやりどころに困る」

卓巳はそう言いながら廊下に出て、うまい具合に通じかけた見回りの教授に桜を引き渡した。

「まったく、消灯後の異性の部屋に忍び込むとはな。初犯だから、処分は説教だけだ。さっさと来なさい！」

「はい……」

桜はうなだれたまま、見回りの教授に引きずられていった。

「トイレに出たときにこそそこそこどこかに行くのが見えたから後をつけてみればこんなことになってるとはね……でも、私たちは行かなくてよかったわ。ねえ明日実ちゃん？」

「そうね。でも私はともかく椿ちゃんには焦る必要はないわよ」

物陰から桜が捕まる様子を眺めていた椿と明日実はそうつぶやくと、見つからないようにこそこそと自分の部屋に戻るのだった。

Part 9：夜中の部屋に忍び寄る黒い影（後書き）

桜の侵入作戦は失敗に終わり、1泊2日の夜は更けていく。
次回で旅行編は終わりです。

感想、評価などお待ちしております。

Part 10：帰りは帰りで大騒ぎ

騒がしかった夜も明け、旅行もあとはそれぞれの家へ帰るだけとなった。

「それじゃ、孝くん。またね」

「ゴールデンウィークに遊びに行くわ。それと、桜さん。孝くんは私の彼氏です！ だからそんなにベタベタしないで！」

「ふふん、ゴールデンウィークまでに孝くんを落としてみせるわ。覚悟しておきなさい！」

椿たちの集合が近づく中、最後まで小競り合いをしている椿と桜だった。

「やれやれ……オレにその気はないから無駄だと思うけどな。とりあえず離れてくれ」

孝は腕に抱きついてる桜をひっぺがし、椿と抱き合った。その後で明日実とも軽く抱き合って、2人と別れた。

と、そこに……

「八坂ー、彼女との別れは済んだかー？ こっちも集合だってよー」

卓巳が孝を呼びに来た。

「ああ、わかった。今行くよ」

孝はそう言っていると、荷物を抱えて集合場所へ向かった。

帰りのバスの中で、桜は孝の隣の席を望んだが、もともと隣の席にいた卓巳が交換を拒否し、孝の席の周囲が一触即発の危険地帯となつて少し騒がしくなったものの、

「アンタはいい加減諦めるってことを覚えなさいっ！」

卓巳とにらみ合いを続ける桜の後ろから別の女子が出てくると、桜にチョップを食らわせて気絶させ、静かにした。

「サンキュー、助かったよ。さすがに女の子は殴れないからな」

にらみ合いをしていた卓巳が緊張をほぐしてチョップを放った子

に礼を言う。

「どういたしまして。ああ、そういや自己紹介してなかったかな。アタシは薫、上野うえの薫だ。かある桜とは高校からの友達なの」

薫と名乗ったそのクラスメートは気絶した桜を引きずって自分の椅子に戻っていった。

「それにしても、だ。バスが走ってるのによくあんなに動き回れるな」

事の成り行きを見守ることしかできなかった孝がポツリとつぶやいた。

「そついやそうだな。いまどの辺だ？」

卓巳が外を見ると、詳しい場所はわからないものの、バスは高速道路を時速100キロで走っていた。

「橋本さんといい、上野さんといい、走行中のバスで暴れるなよな……」

孝は呆れたようにそつつぶやき、やがて静かになった車内で眠ってしまった。

「ふわあ……着いたみたいだな」

孝があくびをしながら辺りを見回すと、ちょうど解散場所の駅に着くところだった。

「いたたあ……あたしいつの間に寝てたんだろ……しかも首が痛い……寝違えたかな？」

ずっと気絶していた桜も目を覚まし、バスから降りたところで一行は解散した。

「やさ……じゃなくて孝くん、一緒に帰ろっ！」

首を押さえつつも、桜は孝を見つけると、そう言っただけで抱きついてきた。

「いちいち抱きつかないでくれ。それに、アパートが隣同士だからって一緒に帰る義理はないだろ？ このあとオレはいろいろと買い

物しなくちゃならないからな」

孝は桜を突き放すと、駅の方へ去っていった。

「ちよつ、買い物くらいならつきあうよ？ あつ、孝くん、待ってえ〜！」

桜も去っていく孝を追って駅の方へ走っていく。

「たいした買い物じゃないから、ついてくるなあ〜！」

旅行の疲れもなんのその、駅の中、さらには街中を舞台に日が暮れるまで孝と桜の追いかけっことは続いたのだった。

Part 11：桜の意外な一面？

講義が始まって数日が過ぎた。1年生は何かと必修系の講義が多いので、クラスごとに固まるケースも多い。

「なんでいちいちオレの隣に座るんだよ？ 他の女の子みたいに女子同士で固まりやいいんじゃないのか？」

クラスごとの講義で毎回のように孝の隣に陣取る桜に対し、孝も最初のうちは偶然で片づけていたが、数日間に渡って続いたので、ついに気になってたずねた。

「だって、孝くんが好きなんだもの。好きな人のそばにいたい気持ちにはわかってくれるよね？」

桜は孝を見つめてそう話した。

「わからなくはないが、その気持ちは報われることはない。キミのほうこそそれを理解して誰か別の男を探すべきだ」

孝は桜を冷たく突き放す。

「ほら、八坂くんもそう言うてることだし、いい加減諦めなよ。桜は十分美人な部類に入るんだから、何も八坂くんにこだわらなくたっていい男はたくさんいると思うわよ」

横から話に入ってきたのは、薫だった。

「オレもそう思うぜ。何もオレみたいなパツとしない男を選ばなくたってこの大学内だけでもいい男は結構いると思うぞ」

孝も薫の意見を肯定した。

「そう簡単に諦められないよ。孝くんって背も高いし、カッコいいよ。彼女いたって遠距離恋愛じゃ破局すること多いらしいし、まだあたしにもチャンスはあると思うてる。あたし、諦めないわ」

桜はグツと握りこぶしをつくってそう宣言する。

「いや、そんな決意表明されてもなあ……」

困惑する孝をよそに、ひとり気合いの入る桜だった。

講義を終えた孝が帰宅すると、先に帰っていたのか、桜が自分の部屋のドアの前に立っていたが、どこか顔が青い。

「橋本さん、どうかしたか？ 顔が青いぞ？」

孝が話しかけると、

「あつ、孝くん……家のカギを落としたみたいで入れないの……」

桜は今にも泣き出しそうな声で孝にそう言った。

「こないだオレの部屋のカギを開けたように開けられないのか？」

孝がそつたずねると、

「道具は部屋の中にあるから今はできないわ……」

桜は落ち込んでいるために小さな声で答えた。

「うーん、とりあえずカギ屋を呼ばないといけないな。電話して、来るまでの間はうちにいればいい」

孝は桜にそう話し、カギ屋に電話させた。

「もう今日の受付は終わってるから来るのは明日の午前中になるって……」

桜がそう伝えると、

「仕方ないな。今夜はうちに泊まるといい。だけど、変なことするなよ」

孝は桜に念を押して、部屋に上げた。

「タダで泊めてもらうのも悪いから、夕食はあたしが作るよ」

桜は手際よく冷蔵庫から材料を出して料理を作っていく。しばらくして出来上がったのは、家庭料理の定番、肉じゃがだった。

「……どうかな？」

桜が不安そうに孝にたずねる。

「うん、美味しいよ。予想していたよりもはるかに、ね」

孝はそう言つて桜に笑いかける。

「そんな顔されたらますます好きになっちゃうじゃない……」

桜は孝に抱きつこうとしたが、

「それとこれとは話が別だ」

孝は素早く立ち上がり、うまく避けた。

「ちえー、そう簡単には行かないかー」

桜は少し不満そうだが、

「まあ、昼間の繰り返しになるけど、料理ができる女の子ならオレ以外にたくさんもらい手はあるだろうな」

孝は桜をそうなだめた。

「先に風呂入ってきなよ。いま沸かすから」

孝はそう言って風呂のほうに行こうとしたが、

「着替えがないから今日は入れないよ」。明日は休みだから別に入らなくてもいいけど……」

桜はそう言って断った。

「そうだったな。じゃあもう布団敷くよ」

孝は風呂をやめて押し入れから布団を出すと、

「布団は一つしかないから、橋本さんが使ってくれ。オレはソファで寝るから。おやすみ、ゆっくり休んでくれ」

孝は桜にそう言くと、ソファでタオルケットをかぶり、さっさと眠りについた。

（これじゃ、襲えないじゃない……）

桜は密かにそうつぶやくと、布団に潜り込んだ。

翌朝、カギ屋が来てカギを交換し、桜は無事に部屋に戻ることができたのだった。

Part 12: ゴールデンウィークまであと少し

ゴールデンウィークまであと1週間ほどになったある日の午後、孝の携帯にメールが入った。

「5月3日に明日実と2人でそっちに遊びに行くわね　椿」か……修羅場にならなきゃいいんだけどなあ……」

孝の独り言が風に流され消えていった。

「孝くん、待つてえ〜！」

「いちいち叫びながら追いかけてくるな〜！　3年前と人は違えど同じことの繰り返しじゃないか〜！」

孝がそう叫ぶと、

「3年前って、あの2人ともこんなことをやってたの？」

桜はいったん止まって孝にそうたずねる。

「正確には、やってたのは明日実だけだな」

孝はそう言うのと、桜に3年前のことを話した。

「へえ〜……明日実さんとあたしは似てるんだね〜」

桜がそう言うのと、

「はた迷惑なところは3年前の明日実とそっくりだ。別にそれはオレが明日実を選ばなかった理由とは関係ないが、もしかしたら明日実はそう思ってるかもしれないな」

孝はそう話した。

「ふーん、孝くんってあたしより前にも結構ドタバタした日常を過ごしてたんだね」

桜はそう言うって笑った。

「だからって橋本さんのやることに耐性があるわけでもないからやめてほしい。ゴールデンウィークには椿と明日実がこっちに遊びに来る。こないだの親睦旅行のときみたいな修羅場はもう見たくないからすっぱり諦めてくれると助かるんだがな」

孝が桜にそう頼むと、

「そう簡単に諦められる恋ならとくに諦めてるよ。まあ、あたしとしてもあまりケン力はしたくないから椿さんたちが来ている間は大人しくしてるわ」

桜は妥協案を提示した。

「うーん……まあ、修羅場にならなきゃ今回はいいか。でも、あくまでオレの気持ちは変わらないから、さっさと諦めて他にカッコいい男を探した方が賢明だろうな」

孝も仕方なく妥協案を受け入れ、授業が違うので桜と別れた。

一方、そのころの椿たちは

「ハックション！　うう、誰か噂してるのかな？」

明日実が盛大なくしゃみをしていた。

「孝くんくらいしかないわよ、明日実の噂をしたら。どんな噂かまではわからないけど」

椿が昼食を取りながら明日実とそう話す。

「でももうすぐゴールデンウィークだね。孝くんに会うの楽しみだな」

明日実は笑ってそう言った。

「私ももちろん楽しみだけど、あの旅行のときに会った桜さんが孝くんにかよつかい出してないか、それだけが不安なのよね……大丈夫だとは思っけど」

椿は不安を口にした。

「あのときに孝くんも言ってたじゃない、“オレの彼女は椿ただひとりだ”って。ちょっと妬けちゃうけど、そう簡単に孝くんは落ちないと思うよ」

明日実はそう椿を励ました。

「そうよね、彼女である私が信じないで誰が他に信じるんだろうね。もう大丈夫。私は何があっても孝くんを信じるわ」

椿はそう明日実に告げた。

「そつだよ。それでこそ椿ちゃんだよ。あつ、そろそろ次の講義の時間だよ。行こつ、椿ちゃん」

「そつね、行きましようか」

2人は食器を片付け、食堂を後にしたのだった。

Part 13：椿&明日実の来訪

ゴールデンウィーク、後半の連休開始の5月3日。早朝6時の長野駅に椿と明日実の姿があった。

「こないだ偶然親睦旅行で会ってるけど、孝くんに会うの楽しみだな。あつ、新幹線来みたい。行こつ、椿ちゃん」

「ええ、楽しみね。それじゃ、行きましようか」

2人は新幹線に乗り込み、一路東京を目指すのだった。

同時刻、孝はすでに起きて部屋を片づけようとしていた。

「昨日は全然片づけられなかった……少しは片づけないと2人を部屋に上げるわけだからな」

孝はそうつぶやくと、掃除に取りかかった。

と、そこに外側から力ギが開けられる音がして、ドアがゆっくりと開いた。

「あれ？ 起きるの早いんだね……ちえつ、失敗か」

ドアを開けて孝と目があつた状態で固まった桜はそう言つと、ドアを閉めて撤退しようとした。

「ちよい待った。オレが起きてなかったら何をするつもりだった？」
孝は桜をとつ捕まえて問いただした。

「まだ椿さんは来てないみたいだし、今ならまだ既成事実作っちゃえば勝ちかな、と……」

桜は乾いた笑いを浮かべながら侵入の理由を説明した。

「まったく、油断できないな。今日、椿たちが来るからしばらくは大人しくしてしてくれよ。そういう約束だったはずだしな」

孝はため息をついて桜にそう告げ、家に帰した。

「さて、さつさと片づけないと2人が来ちゃうな」

桜と騒いでいたせいで、いつの間にか時計は午前8時30分を指

していた。

と、そこに椿からメールが入った。

「いま東京駅に着いたよ」……ってことはここまで来るのに最短であと30分つてところか。駅に迎えに行くからあと15分ほどで片づけを終わらせないとならないか」

孝は時間を見て、急ピッチで片づけを進めた。

そして30分後、孝は駅で椿たちを待っていた。

（そろそろかな……）

携帯で時間を見ながら孝がそう思っていると、

「あつ、孝くん！」

ちようと到着した電車に乗ってた人が階段を上がってくる中、椿と明日実の姿もあった。改札の外にいる孝に気づいた明日実が声を上げる。

「よっ」

孝も軽く手を挙げる。

「久しぶりっ、孝くん！」

改札から出たところで椿が孝に抱きついた。

「ああ、久しぶりだな。それじゃ、こんなところで立ち話してるのもなんだし、アパートに行こうか」

孝はそう言くと、2人の荷物を持ってアパートに向かった。

「結構片づいてるんだね。男の子の一人暮らしって物が散らかってるイメージがあったけど……」

アパートに到着して孝の部屋に入った2人が最初に言ったのはそれだった。

「今朝までに頑張って片づけたんだよ。彼女を部屋に上げるのに散らかってるって最悪だろうしな」

孝は昨日のうちに買っておいだジュースを2人に出しながらそう

話した。

「私はあまり気にしないよ。むしろ片づけが楽しいからちよつとだけ楽しみにしていたし」

椿がジュースを飲みながら孝に笑いかける。

「そうは言ってもせっかく遊びに来た彼女に掃除をさせるわけには行かないからな。それで、どこか行きたい場所とかある？ まだこの街に慣れた訳じゃないからあまり案内とかはできないけど」

孝が2人にそうたずねると、

「うーん……今日はどこも行かないでゆっくりしたいな。一応私たちは明後日までこっちにいるつもりだから」

椿はそう言つと、孝に寄りかかってきた。

「そっか、わかった。今日はゆっくりしようか」

孝は椿を抱き寄せてそう言つた。

「私も混ぜてよー！ 2人の世界に入らないでー！」

明日実がそう叫んで椿とは反対側に陣取り、孝に寄りかかった。

（これって端から見たら微妙にハーレムなんじゃ……）

孝がそんなことを考えてるとは知らず、椿と明日実は休日を通すのだつた。

「約束だし、椿さんたちがいる間はおとなしくしようかな」

隣の部屋で壁に耳を当てて孝の部屋の様子をうかがっていた桜は、ため息をつきながらそうつぶやくと、ひとりどこかへ出かけるのだつた。

Part 14：遊びに行こう！

翌朝。

「おはようっ！ 孝くん！」

朝の8時から明日実が孝の寝ているソファーに飛び乗った。

「ぎゃっ！ 明日実、朝から暴れるな！」

孝は衝撃の大きさに悲鳴を上げて飛び起きる。慌てて起きあがったので、上に乗った明日実ごとソファーから落っこちてしまった。

「いたた……」

明日実が顔を上げると、孝を下にしていた。

「いつてえ……おい、明日実。なるべく早く退いてくれると助かるんだが。し、痺れてきた……」

孝は明日実にそう告げる。明日実が乗っているのは、孝の下半身だった。

「あつ、ゴメン、孝くん。大丈夫？」

明日実は慌てて下りると、今まで乗ってた部分をなではじめた。

「つて、どこを触ってるんだ！？ これを子供が読めないストーリーにするつもりか！？」

孝が急いで明日実を止める。

「私だつて3年前は椿ちゃんに負けたけど、完全に諦めたわけじゃないんだよ？ チャンスがあれば狙ってると思ったほうがいいよ」

明日実はなおも孝にとっては危ない場所をなで回しつつ、孝に微笑みかける。

「ストップ。はい、そこまでよ。明日実、抜け駆けをしようとするのは3年ぶりね。ダメよ、孝くんは誰にも渡さないんだから。明日実にも、もちろんあの桜さんにも、ね」

そこでようやく椿が起きてきて明日実を止める。

「ちえ〜。そう簡単には行かないかあ〜」

明日実はしぶしぶ孝から離れる。

「よっ……と、今日はどこに行くんだろ？ どこに行く？」

孝は起きあがりながら、2人にそうたずねた。

「とりあえず、午前中は観光したいかなっ！ 東京タワーに、上野動物園も行きたいなあ〜」

「買い物もしたいわ。渋谷、原宿、池袋……」

2人は昨晚のうちに考えたのか、行きたいところを次々と挙げていった。

「ストップストップ！ 1日じゃそんなに回れないよ！ もう少しぼつてくれ！」

あまりの多さに孝が慌てて2人を止めた。

「やっぱ無理があったか。じゃあ、私は東京タワーが最優先かな」

明日実が一番行きたいところだけにしぼり、東京タワーに決めた。「それじゃあ、私の買い物は渋谷にするわ。たぶんいっぱい買うかもしれないから先に明日実の行きたい東京タワーに行きましようよ」

椿も買い物したい街の中からひとつにしぼり、渋谷に決めた。

「よし、決まったな。それじゃ、朝食を済ませたらすぐに行こうか。せつかくこつちまで来たんだ、長く遊びたいだろ？」

孝はパンをトースターに突っ込みつつ、2人にそうたずねる。

「うんっ！ やっぱり長野ってあまり遊ぶところないからね〜」

「そうね〜。カラオケくらいしかないものね〜」

2人はうんうんと頷きあった。

「よし、しゅっぱーっ！」

かくして、朝食を済ませた3人は都心で思い切り遊ぶために出かけるのだった。

「おっ、3人で出かけるのかな？ なんか面白そうだし、緊急尾行作戦、開始〜っ！」

その様子をドアを少しだけ開けて見ていた桜も、急いで支度して孝たちの後をつけていくのだった。

Part 14：遊びに行こう！（後書き）

都心のほつに遊びに出かけた3人&それを尾行する桜。
騒動が起こるのは必然か！？

Part 15：東京タワーにて（前書き）

毎日更新が途切れてしまい、すいませんでしたー！

それと、前作「ラブコメ？」が累計4000Hit、こちらの「ラブコメ？―Second Season―」もこの回の更新前に1000Hitに到達していました。

読んでくれる方々に感謝いたします。

Part 15：東京タワーにて

「わぁ、やっぱり近くで見ると大きいな」

3人は、東京タワーにやってきていた。

「中学3年のときだったか？ オレと椿は一度ここに来てるよな」

展望台へのぼるエレベーターの中で、孝が椿にそう話した。

「うん、あったよね。そのときに私と孝くんが同じ班でさ、班行動のときに誰かが別行動しようとか言い出して別れたら、それを先生に見つかってこっぴどく怒られたよねえ」

椿も当時のことを思い出し、昔話に花を咲かせる。

「ねえ、それって何月くらいのこと？」

ずつと話を聞いてるだけだった明日実が唐突に2人にたずねる。

「えーっと、そうだな……たしか梅雨の時期だったから6月だったと思うけど、なんで？」

孝がそう答えると、

「それじゃ、あれはもしかしたら孝くんだったのかなあ……」

明日実が意味深なことをつぶやく。

「あれって、なんだ？」

孝がさらにたずねると、

「私も中学3年の6月に東京タワーに行ったんだけど、そのときの班行動の途中で孝くんによく似た人を見たんだ。確証はなかったし、すぐに見えなくなったからわからないけどね」

明日実はそう話した。

「そっか。もしかしたら本人だったかもな。でも、今となっては確かめる方法はないし、高校で再会できたからもう思い出す必要もないか」

孝がそう言っているうちに、エレベータは大展望台に到着した。

一方そのころ、孝たちを追いかける桜は……

「大展望台へ行くみたいね。それにしても、3人とも歩くの速いな」
孝たちの後を見つからないように歩いて東京タワーに入ると、孝たちの乗ったのは別のエレベーターで桜も上へ向かった。

「うわあ、下から見てもすごかったけど、上から見るとやっぱりもつとすごいね」

明日実は展望台にある望遠鏡で景色を見ながら子どものようにはしゃいでいた。

「そうだな、4年ぶりに来たけど昔とは変わったかな、この辺は」
孝も肉眼で外を眺めながらそうつぶやく。

「あれっ？ 桜さん？」

そのとき、椿がたまたま後ろを見ると、桜がエレベーターから出てくるところだった。

「あれ、橋本さん。偶然……なわけないか。つけてきてたの？」

孝も振り向き、桜を発見すると、そうたずねた。

「あう……バレちゃったか。そうだよ、尾行してたよ。あたしだって孝くんを狙ってるんだよ。孝くんと女の子が出かけるなら出先で何するかわからないし、尾行するっきゃないでしょ」

桜はもはやごまかすのも無駄だと思ったのか、あっさり認めた。

「ついてくるな、って言っても無駄なんだろうな。仕方ない、一緒に行くか？」

孝は半ば諦めたように桜にそう言った。

「えっ！？ 孝くん、私たちをいろいろ案内してくれるんじゃないの？」

椿が抗議の声をあげる。

「そういうことならやめとくよ。でも、本当はついていきたいけど。じゃあ、あたしはこれで帰るね」

桜はそう話すと、展望台からエレベーターで降りていった。

「へえ……意外だね、てっきりついてくると思ったんだけど」

明日実が心底意外だと言つような顔でそう話した。

「まあ、行っちゃったし、もういいんじゃないか？ オレたちもそろそろお昼にして今度は椿のために渋谷だな」

孝はそう言つと、2人とともに東京タワーを後にしたのだった。

Part 15：東京タワーにて（後書き）

わざわざ尾行までしてきたのに、あっさりと引き下がって帰っていった桜。

そして孝たちは買い物へ向かうが――

Part 16：渋谷でお買い物

東京タワーをあとにした孝たちは、昼飯を近くのファーストフードで済ませたあと、渋谷に来ていた。

「やつぱすごい人の数だな……」

思わず孝がそうばやく。

「そうだね。でも仕方ないよ。とりあえず行こっ！」

椿はそう言くと、孝と腕を組んで歩き出した。

「ちよつと待つてよーっ！ 置いてかないでー！」

明日実も人ごみをかき分け、その後ろを追いかけていった。

「いやー、結構買ったなあ……」

数時間後、孝の両手には持ちきれないほどの買い物荷物がたまっていた。

「あはは、ついつい買いすぎちゃったかも……」

椿と明日実は苦笑いで応えた。

「あつ、すまん。ちよつとトイレ行ってくるな」

孝はそう言くと、2人にいったん荷物を預け、近くにあったデパートに入っていた。

残された2人がデパートの前で待っていると、

「ねえねえ、その2人さあ、俺たちとお茶でもどうかな？」

突然数人の男が2人に話しかけてきた。

「いえ、私たちは連れがいますので、結構です」

椿が丁重に断ると、

「そんなこと言っちゃって、断る口実でしょ？ いいじゃん、行こっよ」

男たちのリーダーっぽい、茶髪の男が椿の肩を抱き寄せようとし

ながらそう言った。

「ちよつと、やめてください！ 私たちはちゃんとした連れがいるんですから！ しかもその連れは私の彼氏です！」

椿が男の手を払いのけながらそう叫ぶ。と、そこに、

「椿！」

孝がようやく戻ってきた。どうやらトイレに行った後、2人に飲み物を買って行ったようで、両手にペットボトルのジュースを持っていた。

「んで、あんたらは何か用？」

孝は2人にジュースを渡しつつ、後ろにかばう態勢を作り、男たちに問う。

「ちっ！」

男たちは無言のまま舌打ちすると、その場を立ち去った。

「やれやれ、オレが席を外した途端ナンパか……」

男たちが見えなくなったあとで、孝がぼやいた。

「東京の男ってみんなあなのかしら？ イヤがってるのに気づけつつーの！」

ナンパされてる間はずっと黙っていた明日実が一気にまくしたてた。

「……帰るか？」

しばしの沈黙ののち、孝がそうたずねた。

「そうだね。帰ろうか」

2人とももうナンパはこりごりとはかりにうんざりした表情でつぶやいた。

「じゃあ、また荷物はオレが持つよ」

孝は2人から荷物を受け取ると、うまく整理して持つことでさっきより見た目の量を減らすことができていた。

渋谷駅に向かう途中には、さっき孝たちがいた場所からだと思えない小路を通らなくてはならない。3人がそこに差しかかったところで、小路の中にあるさらに細い道から、さっきのナンパ集団が現れた。

「おい、その兄ちゃんよお、後ろの彼女を置いてどっか行つてくんねえか？」

さっきの茶髪の男が孝にそう詰め寄る。

「ふっ、悪いがそれはできない相談だな。あんたらが声をかけた椿はオレの愛する彼女だし、もうひとりも大切な幼なじみだからな」

孝は男たちを鼻で笑い、そう言い切った。

「てめえ、ケンカ売ってるのか？ 話し合いで解決してやろうと思つてたが、こうなりや力づくでも！」

男たちはそう言つと、孝に殴りかかってきた。

「あんたら、バカだろ？ 仮にオレを力づくで倒したところで、それを見ていた椿たちがあんたらについていくとも思っているのか？」

孝は整理した荷物を地面に置くと、殴りかかってきた男たちに立ち向かつていった。

「孝くん、強い！」

数分後、男たちはみんな地面に伏していた。

「さて、こんなところに長居しても仕方ないし、早く帰ろうか」

孝は地面に置いた荷物を拾い上げると、2人を促して歩き出した。と、次の瞬間。

「このヤロー、ぶっ殺す！」

リーダーっぽい茶髪の男が立ち上がり、ふところからバタフライナイフを取り出して刃を出すと、後ろから猛然と孝に襲いかかった。「しまっ——」

「孝くん、危ないっ！」

背後からの襲撃だったことや荷物を持っていたこともあって反応が遅れた孝を、椿が突き飛ばした。直後、男のナイフは椿のわき腹に突き刺さった。

「椿ーっ！ だ、誰か救急車を呼んでくれ！」

「椿ちゃん！ いやあああ！」

孝と明日実の絶叫が夕暮れ前の渋谷の街に響きわたったのだった。

Part 16：渋谷でお買い物（後書き）

あー、前作に続いてまたしてもベタな展開です。
でも今回はかなりやばいかも……

Part 17：椿を救え（前書き）

逆ギレしたナンパ男の凶刃から孝をかばい、倒れた椿。
椿を救うことはできるのか？

Part 17：椿を救え

救急車で病院に運ばれた椿は、医者処置を受けていた。

「くそ、なんで椿が……」

孝は処置室の前の長イスに腰掛けながら拳でイスを殴る。その目には涙が浮かんでいた。

と、そこに処置室から医者が出てきた。

「桐生椿さんと一緒にいた友達の方ですね？」

思わずイスから立ち上がった孝と明日実に医者が話しかけた。

「そうです。椿は大丈夫なんですか！？」

孝は医者につかみかかる勢いでたずねた。

「キズ自体はそれほど深くないので今の処置でふさぎました。ですが、出血が多く、輸血が必要なのですが、A B型の血液型の方はいますか？」

医者は孝たちを見てそう問いかけた。

「ああ、一応オレがA B型です。使えるならオレの血液を使ってください！」

孝は医者にそう話した。

「ちよつと待つてください。患者の血液型はA B型の中でも特殊なものですね、家族でも合致する確率は1%以下、ましてや他人ならそれこそ天文学的な確率になってしまうので、輸血ができるかどうかは検査を受けてからになります、構いませんか？」

医者は一度孝を制すると、そう付け加えた。

「ああ、もちろんだ。すぐにも検査してくれ。椿を少しでも早く救ってやりたい」

孝はそう言うと、医者とともに血液検査に向かった。

30分ほどして、待っていた孝のところに医者がやってきた。

「オレの血液は使えるんですか？」

孝が真っ先にそうたずねると、

「残念ですが、合致しませんでした。このまま血液が足りない状態が続けば患者の生命は保証できません。いま血液バンクや他の病院に問い合わせていますが……」

医者はゆっくりと首を振り、消え入りそうな声でつぶやいた。

と、そこに事件の際に警察から連絡が行っていたのか、椿の家族が駆けつけた。

「孝君！ キミがいながらなんで……」

椿の父親が泣きながら孝を責める。

「すみません……まさか椿がオレをかばうなんて……」

孝は悔しそうにそうつぶやく。

「私や椿ちゃんは三年前に孝くんを目の前で事故に遭わせちゃってるから、とつさに、もう孝くんを失いたくない、って思ったんじゃないかな？ 私が椿ちゃんの立場でも同じことをしたでしょうし」

明日実は椿が孝をかばった理由をそう推測した。

「オレは血液型が同じだけど、椿を救ってやれない。希望はもう家族のみなさんしかないんです」

孝は父親たちにそう話して血液検査を受けてくれるように頼む。

「もとよりそのつもりだよ。家族の中でもA B型は父親である私人しかいないが、最後の希望となれると信じたい」

父親はそう言うと、血液検査に向かった。

「わずかな可能性に賭けて他の知り合いも当たってみるか」

孝はいったん病院を出て、東京での知り合いに片っ端から連絡を取り始めた。と言っても卓巳、義仁、桜くらいしか番号を知っているのはいないが……

結論として、3人の中にA B型は桜だけだった。だが、桜との会話の中で、どうやら薫もA B型らしいことがわかった。孝が桜を通じて頼んでみると、薫は快諾してくれ、渋谷の病院まで2人で来てくれることになった。

「父親である私も血液のタイプは一致しなかったか……もう血液バンクとかに頼るしかないのだろうか？」

孝が携帯を切って病院内に戻ると、どうやら検査の結果が出て、しかもダメだったのか、父親が落ち込んでいた。

「いま、オレの知る限りの最後の希望になるかもしれない人を呼びました。ここから遠くないので15分ほどで来るそうです。もしこれでダメならあとは血液バンクに頼るしかないです」

孝は父親にそう声をかけた。

「あとは時間との闘いか……」

Part 17：椿を救え（後書き）

同じAB型でも椿の血液型は特殊で孝も父親さえも合致しなかった。この危機的状况の中、孝が“最後の希望”とした人物——桜と薫。果たして2人のうちどちらかでも椿と合致し、椿を救うことはできるのか？

Part 18：椿を救え その2（前書き）

えーと、ちょっと遅めのお知らせです。

秘密基地のイラストコーナーに神埜陣八さんが描いてくださった桜と、10話と17、18話に出てきてる薫のイラストが掲載されています。

作者自身驚くほどイメージぴったしなのでぜひ一度ご覧ください。

Part 18：椿を救え その2

15分ほどして、桜と薫が病院に到着した。

「八坂くんの彼女が刺されて重傷って聞いたけど、大丈夫なの？」

薫は孝を見つけると真っ先にそうたずねた。

「キズはふさがってるけど、輸血しないと危険な状態だ。だが輸血しようにも椿はA B型の特殊タイプで、家族でも合致せず、他人ならなおさら合致する確率は低いが最後の希望で2人を呼んだんだ。協力……してくれるか？」

孝が薫たちに状況を話し、頼み込むと、

「もちろんいいよ。アタシたちは事情を多少聞いた上で来てるんだから」

薫は頷き、桜とともに血液検査に向かった。

しばらくして、検査の結果が出た。

「これは、奇跡か……？」

検査の結果を伝えられた椿の父親はそうつぶやいた。

桜は合致しなかったが、薫が天文学的な確率の壁を乗り越え、奇跡的に完全に一致したのだった。

「上野さん、椿と何の関係もない君に頼むのは筋違いかもしれないが、それを承知で言う。椿を助けてくれ」

孝が薫にそう言っただけで頭を下げた。

「ちょっと、頭なんて下げないでよ。確かにアタシと椿さんは直接のつながりはないけれど、クラスメートである八坂くんの彼女、って言うつながりがあるじゃん。それに、現状で輸血できるのはアタシのだけなんでしょ？ そんな状況で見捨てるほどアタシは冷たくないよ」

薫は孝の頭を上げさせ、そう話した。

「上野さん……それじゃあ……」

孝の表情が明るくなり、そう言つと、

「アタシの血液で人を救えるならいくらでも使つていいよ。急ぐんでしょ？　ちゃちゃつと済ませちゃってくださいな」

薫はそう話すと、医者とともに小部屋に入つていった。

「ありがとう……ありがとう……」

薫を見送る孝の横では、椿の父親が涙を流しながらそう言つていた。

無事に輸血も済み、椿の生命の危機は去つた。

それから数時間後、椿が目を覚ました。

「よかつた、無事だつたんだ、孝くん……」

椿は目を覚ましてすぐに孝を心配することを口にしたので、

「バカ、なんでそんな大ケガしてまでオレを心配してるんだよ……」

少しは自分の心配もしろよ……」

孝は思わず椿の頭を軽く小突いていた。

「だ、だつてえ……あのときとつさに三年前のことがフラッシュバックしたんだもん……もうあの時みたいな思いをしたくないって思つたら体が動いてたの……」

椿はあのときのことをそう弁解した。

「やつぱり、三年前のことが……」

明日実がそうつぶやく。

「ええ、そうよ。でも、刺されて結構血が出たのは覚えてるんだけど、その後どうなったの？」

椿がそうたずねる。

「キズは大したことはなかったが、出血が確かにひどくてな。輸血がなかったら命に関わっているところだった。同じＡＢ型でもオレ

や親父さんではタイプがあわなくてな、輸血をしてくれたのは、そこにいる上野さんだ」

孝が説明し、最後に薫を指す。

「初めまして、アタシは八坂くんのクラスメートの上野薫だ。親睦旅行のときは親友の桜が迷惑をかけたみたいだね」

薫はベッドのそばに來ると、そう挨拶した。

「桜さんとは現在進行形で争ってますが、負ける理由がありませんし、薫さんが気にする必要はないですよ。それより、ほとんど見ず知らずの私を助けてくれてありがとうございます」

椿は薫にそう礼を言った。

「いやいや、助かってよかった。それじゃ、アタシらはこの辺で帰るね。桜ー、そろそろ行くよー」

薫は桜を呼び、病室を出ようとした。しかし桜が出てこようと思わない。

「えー、もう行くの？今のうちに孝くんを落とそうかと思ってるのに……」

桜はそう渋っていた。

「ちよっと、桜さん？そういうのはライバルである私がいなくてここで言うものじゃないのかしら？」

椿が笑顔をひきつらせながら桜に問いかける。

「たとえ本人がいたって動けなければ意味ないもーん」

桜は椿に見せつけるように孝に抱きついた。

「はい、そこまで。アンタはまだ諦めてなかったのね。ホントいい加減にしなさいよ」

薫が桜に得意技（？）のチョップを食らわせ、そのまま引きずっていく。

「薫ちゃん……ひどいよぉ」

気絶はしなかったものの、力が入らない桜は引きずられながらその抗議の声をあげる。

「アンタを止めるのに他にどんな方法があるってのよ」

薫はまともに取り合わずに桜を引きずっていった。

数日後、ゴールデンウィークは終わっていたが、椿は無事に退院し、明日実とともに長野へ帰っていったのだった。

Part 18：椿を救え その2（後書き）

無事に椿も助かり、一件落着。

グダグダにならないうちに終わらせようと思いますので次回で最終話にします。
ご了承ください。

The Final Part…エピソード（前書き）

どんな騒動があろうとも、季節は常に巡ってゆく……

The Final Part: エピローグ

季節は巡り、再び春がやってきた。

結局孝は1年生を終えようとしている今になってもまだサークルをどこにするか悩んでいた。

もうすぐ新年度が始まる、ある日の昼下がり。2台の引っ越しトラックがアパートの前に止まった。

「ん？ そういやこないだ1階に住んでいた人が2人卒業してここから引っ越していったっけな。その空き部屋に新しい人が来たのかな」

外の様子を眺めながら孝はそうつぶやいた。

夕方、孝が夕飯を作っていると、チャイムが鳴った。

「はいはい、どちらさまー？」

孝が火を止めてドアを開けると、そこには……

「孝くん！ 久しぶりっ！」

ドアの前にいたのは椿と明日実の2人だった。

「おう、久しぶりだな……じゃなくて、なんで2人がここに？」

孝がそうたずねると、

「今日からこのアパートに2人一緒に1台のトラックで引っ越して来たんだよー。私が102号室、椿ちゃんが103号室だよ」

明日実が笑顔でそう答える。

「でも光稜大学はどうしたの？ まさかここから通うわけでもあるまいし」

孝がさらに突っ込む。

「光稜大学は中退して、2人とも都台大学の2年次編入試験に合格したの。だからこの春からまた一緒に通えるよ」

椿が孝の疑問を一発で解決するかのように答えた。

「なんでわざわざ……でも、うれしいな。また一緒だな、2人ともよろしく」

孝はそう2人に話した。

「あれーっ!?　なんで2人がここにいるの!？」

そこにちょうど帰ってきた桜が叫び声をあげた。

「桜さん、今日からこのアパートに引っ越してきて、今年から都台大学の同じ2年生ですので、よろしくお願いしますね。私がいる以上、孝くんは渡しませんのでそのつもりでいてくださいね」

椿が引っ越しの挨拶ついでに桜に改めて戦線布告をした。2人の間に火花が舞い散る。

「2人は1階の部屋でしょ?　2階の、しかも隣の部屋に住むあたしを止められるとでも?」

桜が不敵な笑みを浮かべる。と、

「アンタを止めるにはアタシが出るしかなさそうね」

桜の部屋のもうひとつ隣、201号室から誰か出てくると、話に入ってきた。

「その声は、薫!?　なんでここに?」

振り向いた桜が乱入者の正体を見て驚いた。

「なんでって、このアパートなら大学が近いし、家賃とか条件もいいから引っ越して来たのよ。同時に着いたトラックにまさか椿さんたちがいるとは思わなかったけどね」

薫は笑いながらそう話した。

「薫さんが201号室で桜さんを監視してくれるならかなり安心ね。そういうわけで、桜さんも薫さんもこれからよろしくね」

椿は改めて一礼すると、明日実とともに階下のそれぞれの部屋へ戻っていった。

「しっかし、すごい偶然ね。去年いろいろあったメンバーの大半が同じアパートに集結するなんて……」

薫が笑いながらそうつぶやく。

「ああ、こりゃ去年以上に騒がしくなりそうだ」

楽しい女性陣を尻目に孝は1人頭を抱えるのだった。

そんな孝の悪い予感は的中し、お約束のごとく明日実VS椿VS桜の三つ巴バトルが繰り広げられていた。薫は時折暴走の度合いが過ぎた桜を止める役割を担ってくれ、孝にとって強い味方となっていた。

彼らが大学を卒業するまでこの騒動は続いていくのだが、それもまたお約束なので、あえて語る必要もないだろう。

完

The Final Part: エピローグ（後書き）

これで完結となります。

このシリーズはもう作る予定はありません。シリーズ完結です。中途半端かもしれないですが、作者の実生活がそろそろしんどいのです。ご了承ください。

それでは、ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7755b/>

ラブコメ？—Second Season—

2010年10月8日14時24分発行